

生態を知る

水辺で寄り添い合うオシドリたち。オシドリはどこから来て、どこへ飛び立つのか。その知られざる生態の研究を重ねる「日本野鳥の会鳥取県支部顧問」細谷賢明さん（気高町）に話を聞きました。

アジア東部に分布

秋に飛来し春に再び北へ

オシドリは主にアジア東部に分布し、ロシア（シベリア、サハリンなど）、中国東北部、朝鮮半島北部、日本などで繁殖。秋になると西日本や朝鮮半島南部、中国南部などに渡来します。

北海道から沖縄まで生息、繁殖を記録し、国内で越冬する数はおよそ3万5000羽。鳥取県内には約2000羽が

飛来すると推定されます。

鳥取県内でも少数の留鳥もいますが、多くは北日本からの漂鳥、シベリア東南部など大陸から渡って来た冬鳥の3種類と考えられます。秋にやって来た鳥たちは県内で越冬し、春になると再び北の方へ帰っていきます。

美しい羽を持つオスと

全身が灰褐色の地味なメス

体長は41センチから47センチで翼

を広げると68センチから70センチ。カモ類の中では小型です。

オスは、後頭部に伸びた紅色から青紫色に変わる冠羽、首に栗色のひげ羽、腰に垂直に立った赤褐色のいちよう羽が特徴です。6月ごろになると換羽羽が生え換わる（こと）し、メスと同じような地味な羽色になりますが、10月ごろに再び換羽し、美しい羽色になります。

メスは全身が暗い灰褐色で、胸、脇、腹にかけて灰白色の大小の斑紋が散在。目の周りから後方にかけて白いアイラインがあるのが特徴です。メスも8月ごろに換羽しますが、色はほとんど変わりません。鳴き声は、オスが小さな声で「ウブ」「ツイブ」。メスは「クワツ」と甲高く鳴きます。



細谷賢明さん（気高町）

ほそや・けんめい
県内オシドリ研究の第1人者。日本野鳥の会鳥取県支部顧問。日本オシドリの会幹事。自宅近くの糸祿池（鹿野町）でオシドリ観察を始め約40年。

オスは羽を広げ求愛ポーズ

オシドリの多くは、10月ごろになると北の地方から飛来。やがてオスはメスの前で美しい冬羽を広げ求愛を表現。メスはその中から気に入った相



日野川で育ったヒナたち。母親といっしょに遊泳





写真 = 左がオスで右がメス 学名 = *Aix galericulata* 分類 = カモ目カモ科 英名 = Mandarin Duck

手を選びつがいになります。

4月から6月になるとメスは産卵から抱卵。水辺に近い林の樹洞などに巣を作るといふ変わった生態を持ちます。巣には外からの材料を入らず、自分の羽毛だけで作ります。

卵は鶏卵よりもやや小さく、一腹の産卵で平均10個ほど産み、約30日間でふ化します。

仲が良い代名詞のオシドリ 実際は違った一面も見せる

オスは、メスが子育てに専念するころ数羽の群れで別行動することが多く、求愛時期のようにつがいできり添うような行動をしなくなります。

古くから「おしどり夫婦」「鴛鴦の契り」などの例えがあります。オシドリは姿が美しいだけでなく、寄り添い合うことが目立つことから、仲が良いことの代名詞に使われていますが、実際の生態は違った一面も見せます。

警戒心が強く臆病な鳥 好物のドングリは丸飲み

オシドリは、平地から標高の高い山地の湖、池、溪流などに生息。とても警戒心が強

く、昼間は枝が茂った薄暗い場所で見られるようにして休むことが多く見られます。エサを食べに出てくるのは夕方から明け方。夜は外敵から身を守るため木の枝の上に止まって寝ます。

食べ物季節によって違いますが、若葉、草の実、稲、ドングリなどを好んで食べます。実の硬いドングリですが、皮ごと丸飲みしてしまいます。また、小魚や小動物なども食べるということが確認されています。

絶滅のおそれがあり レッドブックに選定される

オシドリは、1925年に狩猟鳥から外され、カモ類の中では最初に狩猟が禁じられました。鳥取県では県の鳥に指定されるとともに、絶滅のおそれのある野生動物を記載した「レッドデータブック」とついで「準絶滅危惧（生息状況条件の変化によっては絶滅危惧として上位ランクへ）」に選定されています。

細谷さんは「環境開発が進み、エサとなる木が減っている。鳥と人間がバランスを保ちながら暮らせる環境づくりが必要」と話します。